

貴物と呼ばれた幼少期

空海が生まれたのは、今から1200年以上前、現在の奈良に平城京と言う都を置く奈良時代の774（宝亀五）年6月15日。讃岐の国多度津郡屏風ヶ浦（香川県善通寺市）がその生誕地であると言われている。

生まれた日、生まれた年については多少の説が有る。

生まれた日に関して、密教をインドから中国に伝えた不空三蔵と言う高僧が入滅された日である事から、その生まれ変わりであるとして6月15日が誕生した日として伝えられている。この日は、真言密教のお寺では‘降誕会’‘青葉祭り’と言うお祭りをして、空海の誕生を祝っている。

誕生年に関しても774年説の他に、773（宝亀四）年説がある。これも誕生日同様、不空阿闍梨の入寂が774（中国大歴九）年なので、774（宝亀五）年としておく。

さて、多才な人として知る人ぞ知る空海だが、実は生まれる前から、両親、親族にとって、希望の星であったらしい。『高野大師御広伝』によると、

空海の両親は、ある日の夢にインドからの聖人が飛んで来て、懐に入ってきたのを見た。すると懐妊しており、12ヶ月の長い妊娠期間を経て空海は生まれ来た。

とある。両親の夢に出た天竺（インド）からの聖人が、身中に入って懐妊したというのは吉兆であり、同様に12ヶ月の長きに渡る懐妊の後に生まれるというのも、聖人が生まれるときの兆候のひとつと言われている。親としてもさぞや素晴らしい人間に成長してくれるだろうと、大きな期待を寄せたに違いない。

若き日の空海は、当時としては恵まれた方の家庭環境で勉学に励んでいる。父親は地元の国造（当時の地方を治める官職名で、今で言えば、市長、知事あたりだろうか）である佐伯直田公（さえきのあたいたぎみ）、母も阿刀氏（あとうじ）という名の知れた一族の出身で、共に良い家柄の出である。

1 親不孝者空海

長子が重用される時代に有って、少なくとも二人の兄がいたようだが、そんな中に在って空海は、幼時から神童の誉れ高く“貴物”と呼ばれ、大きな期待をもって育てられている様子が窺える。

また、捨身誓願を立てたといった伝承も残されているのは、幼い時から普通の子供とは違う輝きを見せていたからに外ならない。

親としてそういう子供を大事に育てていたというのは、その後、更に長じた空海に、都での高い勉学の機会を与えたこと等からも窺い知ることが出来るが、空海の方は親の心子知らずと言うか、まだ幼かった為なのか、記録に残る孝行は何一つ見せていない。

それどころか、捨身誓願を行ったということ自体、聖人の幼時からの偉大さを伝える伝承としてはありがたく、素晴らしいことかも知れないが、その時の親の立場に立ってみると、子供が身投げをしたわけだから驚き、悲しむ出来事であったに違いない。